ウスバフユシャク

澄川の森に初雪が降り、薄い雪化粧の歩道を歩いていて、しばしば白っぽい小さな蛾がよろよろと飛び立ち4～5㍍と飛ばないうちに降り立つのですが、小さいので何処にいるのかが判りにくく、カメラで捉えるのに難儀していましたが、ついに捉えた映像をご覧ください。画像には2014年11月20日10時37分と記録されました。和名ウスバフユシャクといいます。天敵が姿を消してから遺伝子を残す行為だけのために雌を探してさすらう雄の姿なのです。雪が来てからも活動する蛾としてご記憶ください。大きさは翅を広げて 24～26 ミリ㍍、と極めてちいさく桜の花びらが風邪に舞っているような感じなのです。

「薄翅冬尺」と漢字をあててみましたが、尺とは尺取虫のことで幼虫の移動体動が頭に近い前足とお尻に近い後ろ脚とで人が手の親指と小指を広げた状態を物指し代わりにするような移動をするイモムシの仲間の称号です。そのユーモラスな動きには癒されます。

雌には翅がありません。退化しているのです。フェロモンを発散して雄に自分の居場所をしらしめるだけの手段しか持っていないので、すべて風まかせ運まかせなのですが、澄川森林のこの虫の密度からして充分な会合機会があるものと思われます。

交尾の様子

幼虫は結構な食いしん坊でして、澄川ではミズナラやイタヤカエデ、エゾヤマザクラなどの葉を食べているようですが、リンゴの害虫でもあるので、さいとうリンゴ園では嫌われているにちがいありません。寒さが増してきて殆どの虫たちの姿が消えたこの時期に森の命の息吹を伝えてくれる嬉しい虫でした。この虫が消えると本格的な冬になるのです。

この日の作業はこの冬除伐予定の外来樹のニセアカシヤ進入状況を参加者全員で確認し、その後除伐作業組と避難小屋建築組とに別れました。建築組は棟梁不在につき、大工もどきたちだけでニセアカシヤの太い芯柱の臍穴あけに四苦八苦していましたが、終には達成してしまいました。本格的な積雪となる前には完成する見通しがついたようでした。